様　式　C－１９、F－１９－１、Z－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２５０５

研究課題名（和文）英米モダニズム文学における環太平洋ナショナリズム表象の思想史的研究

研究課題名（英文）A Historical and Theoretical Study of Representations of Pan-Pacific Nationalisms in Modern British and American Literature

研究代表者
新井　英永（Arai, Hidenaga）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：００２１２５９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英米モダニズム文学が、環太平洋諸国・地域の社会や人々をそれぞれのナショナリズムを背景にどのように表象してきたのかを、文学・思想史的に解明することを試みた。具体的には、英国作家D・H・ロレンスによるオーストラリアを舞台にした長編小説『カンガルー』（1923）と当時のナショナリズムの一形態と目される白豪主義の関係や、米国作家ジャック・ロンドンの短編小説「さよなら、ジャック」（1909）とアメリカ帝国主義の関係について考察し、それぞれ論文にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、欧米のD・H・ロレンス研究者やジャック・ロンドン研究者の盲点となってきたそれぞれの作品における環太平洋ナショナリズム表象やその機能・含意に焦点を当てて考察し、その検討結果を論文の形で発信した。そうすることにより、従来の研究に新たな視座を提供するのみならず、これまで比較されることの少なかった英米の作家をナショナリズムという観点から新たに論じることの意義を明確にし、今後の環太平洋ナショナリズム表象研究の方向性を提示した。

研究成果の概要（英文）：This study examines the representations of pan-Pacific nationalisms in modern British and American literature. Specifically, the relation between D. H. Lawrence’s Kangaroo (1923) and White Australianism, a form of nationalism at that time, is discussed. Meanwhile, the relation between Jack London’s “Good-by, Jack” (1909) and American imperialism is also analyzed.

研究分野：英文学

キーワード：環太平洋　ナショナリズム　英米　モダニズム　D・H・ロレンス　ジャック・ロンドン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

国内外のポストコロニアル批評や文化研究の台頭により「第三世界」あるいは南半球の歴史や文学が注目されると同時に、これらの地域を扱ったモダニズム文学の読み直しも進んだ。しかし、従来の研究は、英文学作品によるアフリカやインド、南米の表象を個別に扱う傾向にあり、アジアを含む環太平洋という広い視座からのモダニズム文学研究は比較的少なかった。

その点、アイルランドやアフリカのみならずオーストラリア、ニュージーランド等の表象を分析した論考も含む Modernism and Empire, ed. Howard J. Booth and Nigel Rigby (Manchester UP, 2000) は、モダニズム文学と帝国主義との関係を多面的に浮かび上がらせようとする画期的な論文集であった。この試みは、より包括的にモダニズムの作家たちを論じようとした Modernism and Colonialism: British and Irish Literature, 1899-1939, ed. Richard Begam and Michael Valdez Moses (Duke UP, 2007) や、Peter Childs, Modernism and the Post-Colonial: Literature and Empire 1885-1930（Continuum, 2007）、あるいは民族誌学の観点を取り込んだ Carey J. Snyder, British Fiction and Cross-Cultural Encounters: Ethnographic Modernism from Wells to Woolf (Palgrave Macmillan, 2008) 等の研究によって、さらには国内の研究によっても補完ないし展開されてきた。

しかし、多地域に及ぶ分析対象をまとめあげる主要参照枠が英国の植民地主義・帝国主義であるため、アメリカ合衆国の存在はあまり視野に入っておらず、そのため環太平洋ナショナリズム表象の研究としては、発展させるべき余地を多分に残していた。アメリカ合衆国の文脈を押さえようとするときに重要な研究は、依然として Walter Benn Michaels, Our America: Nativism, Modernism, and Pluralism (Duke UP, 1995) であった。1920 年代アメリカの主要なテクストを多人種・反同化主義的で反帝国主義・排外主義的な「ネイティヴィスト・モダニズム」の言説と定義するこの著作は、一枚岩ではないアメリカ・ナショナリズムの言説と文学の言説の関係を検討する際に不可欠であるのみならず、19 世紀から 20 世紀にかけての文学作品の変質に関しても極めて有益な見取り図を与えてくれる。こうした北アメリカを軸とした研究成果を、イギリスを軸とした研究成果へと接続することが、求められていた。

２．研究の目的

対象となる環太平洋諸国・地域におけるナショナリズムと照らし合わせたうえで、英文学

による表象の分析と米文学による表象の分析を接続することにより、両者の類似と差異だけでなく「英」「米」の枠を超えた作家間・作品間の類似と差異も明らかになる。さらに、ベネディクト・アンダーソンが指摘するように「ナショナリズムは国際主義（インターナショナリズム）と不可分であり、そのように理解する必要がある」（『三つの旗のもとに』）とすれば、諸ナショナリズムの比較対象とその「英」「米」両者による表象の分析は、環太平洋諸国・地域におけるインターナショナリズム研究への視野も切り開いてくれるかもしれない。

そこで、本研究の目的として、以下の三点を掲げた。

・19 世紀後半から 20 世紀前半の英米国内ならびに環太平洋地域における様々なタイプのナショナリズム思想を分析する。
・いかにそれらの思想が、環太平洋諸国・地域を描写した代表的な英米モダニスト作家たちによる作品に吸収されたか、あるいはそれらの作品で変形されたか、を検討する。
・環太平洋地域をめぐり英米モダニズム文学作品において表象されたナショナリズムの諸相をグローバルな視野から比較検討することにより、21 世紀における環太平洋（インター）ナショナリズム表象研究の可能性を提示する。

３．研究の方法

19 世紀後半から 20 世紀前半に至る英米国内と環太平洋地域における諸ナショナリズムの言説を思想史の文脈で研究し、それを踏まえ英米モダニズム文学における様々な環太平洋表象の検討を行うにあたり、ミシェル・フーコーやドゥルーズ＝ガタリ、エドワード・サイード、G・C・スピヴァク等に代表されるポスト構造主義ないしポストコロニアル批評を参照した。加えて、アーネスト・ゲルナーをはじめとするナショナリズム研究、とりわけナショナリズムの起源をアメリカ植民地に求め、モダニズムの時代をナショナリズムの発展を促した「初期グローバリズム」の時代と捉えるベネディクト・アンダーソンの知見を最大限に活用することを試みた。

一般に国際主義者あるいは平和主義者とみなされる作家が異文化との接触により国民国家主義的になることは珍しくない。逆に、ナショナリストとして知られる作家が異国の地を旅することにより、インターナショナルないしトランスナショナルな連帯を実現したというような事例も存在する。こうした点に留意しながら本研究を遂行するために、モダニズム時代の英米作家・思想家による環太平洋地域におけるナショナリズム表象を次のように分類することを目指した。

1)(a) 環太平洋のある地域で高揚するナショナリズムに恐怖を抱くような表象

(b)あるいは逆に希望を抱くような表象

2)(a) 環太平洋のある地域におけるナショナリズムの希薄さを侮蔑するような表象

(b)あるいは逆に理想化するような表象

3)(a)英・米のナショナリズムを制止しようとするような表象

(b)あるいは逆に推進しようとするような表象

4)(a) 英・米におけるナショナリズムの欠如を嘆くような表象

(b)あるいは逆に称揚するような表象

４．研究成果

D・H・ロレンスについては、「D・H・ロレンスの情動論的読解に向けて：『カンガルー』と『哲学とは何か』」と題した論考において、ロレンス自身のエッセイ " The Novel and the Feelings " やドゥルーズ＝ガタリの『哲学とは何か』を参照しながら、ロレンスの長編小説『カンガルー』における「アボリジニ」の表象を検討し、読者はこの「アボリジニ」の自然（ブッシュ）を訪れるよう招喚されていることを主張した。以下、具体的に説明する。

ロレンスは" The Novel and the Feelings" において "feelings" を、ネグリ＝ハートやドゥルーズ＝ガタリの言う「アフェクト（情動）」、つまり主観のうちに収まる静的な心的現象である感情（emotions）とは異なり、精神と身体の両方に等しく関連し、既存の世界を触発し変容させると同時に自らも世界に触発され変容する力、として把握している。さらに、ロレンスのこのエッセイは、小説の登場人物たちの呼び声に耳を傾ければ小説の "feelings" に接することができる、としているが、この提言はドゥルーズ＝ガタリの、小説に触発する力があれば読者は小説に保存されたアフェクトを受け取ることができる、という主張と同趣旨だと考えることができる。

ドゥルーズ＝ガタリの『哲学とは何か』では、この「アフェクト」やその対概念である「ペルセプト」等が論じられており、これらの概念を参照しつつ『カンガルー』のいくつかの場面を読解すると、『カンガルー』がドゥルーズ＝ガタリが述べるような芸術作品であることと同時に、『哲学とは何か』がこうした芸術作品の読解を通じて「アフェクト」や「ペルセプト」等の概念を練り上げていることがわかる。

『カンガルー』という小説によるオーストラリアのブッシュの風景描写は、このアフェクト（情動）の顕現として肯定的に評価することが可能である。主人公サマーズによってなされたブッシュというアフェクトが働く場所への訪問は一時的かもしれない。しかしながら、この小説にこの風景が保存されることにより、その場所における読者の滞留の可能性は確保されている。というのも、ドゥルーズ＝ガタリによれば、「芸術家は、彼の作品のなかだけで変様態（アフェクト）を創造しているのではない」のであって、「彼は、わたしたちに変様態（アフェクト）を与えるのであり、わたしたちを変様態（アフェクト）とともに生成

させるのであり、わたしたちを合成態のなかに取り込む」(『哲学とは何か』) からである。このようにロレンスも、変様態を通して「アボリジニ」の自然（ブッシュ）を訪問するよう『カンガルー』の読者を促していると言える。

ジャック・ロンドンについては、「三つの奪冠物語：ジャック・ロンドン「さよなら、ジャック」再評価の試み」と題した論考において、アメリカ帝国主義下のハワイの位階秩序を肯定する語り手が、主要登場人物とともに「奪冠」され、その権威が問題化され揺らいでいることを論じた。以下、具体的に説明する。

ジャック・ロンドンの短編小説「さよなら、ジャック」は、主人公ルーシー・モクヌイが女王のごとき地位から転落すると同時に、ハワイにおける産業界の大立者として君臨してきたもう一人の主人公ジャック・カーズデイルも「王冠」を「剝奪」される物語である。小説がオープン・エンディングである以上、カーズデイルが検査後ハンセン病患者としてモロカイ島の隔離施設へ送られる可能性は閉ざされていない。この島がカーズデイルにとっての「楽園」となり、そこでルーシー・モクヌイとともに満ち足りた生活を送ることにさえなるかもしれない。その時、モロカイ島はそこへ向かうときは悲しくても行けば幸せな生活を送ることができ離れがたくなる「すてきな場所」である、という彼自身のことばの正しさが証明されることになる。

一方、検査の結果陰性となりカーズデイルがオアフ島にそのまま居座ると考える方が現実的かもしれない。その場合、この物語の筋（プロット）は、冒頭の語り手の言明（「逆さま」であることが道理にかなっているハワイ）とも符合し、多くの先住民がモロカイ島へ送られる一方、多くのマリヒニ（よそ者）がオアフ島に残るというアメリカ帝国主義下の「逆さま」な国ハワイの現実を反映しかつ肯定することになる 。だが、すでにその偽善や自己欺瞞、肝心なことに関する無知が明らかになったカーズデイルは、象徴的に「王冠」を剥奪されていると言える。

「逆さま」な状態で物事の筋が通っていると主張しハワイの現状を肯定する語り手の権威も、カーズデイルの権威とともに問題化され揺らいでいると考えられる。つまり、カーズデイルの権威の失墜に関する現状転覆的・批判的な語りは、冒頭の現状肯定的・帝国主義的語りと齟齬をきたすため、語り手はその自己矛盾により、あたかもカーズデイルの分身であるかのように、彼と同時に信頼性＝権威を失っている。

ルーシー・モクヌイの「さよなら、ジャック」という台詞は、第一義的には自らの奪冠を受け入れた彼女による別れの言葉であるが、その一方でジャック・カーズデイルの動揺＝奪冠の誘因となる言葉でもあり、同時に、ジャック・カーズデイルが「王」として君臨することを合理的とみなしていた語り手もしくは作者ジャック・ロンドンのまさに「筋」（プロット）を通らなくし、脱線させる言葉だということになる 。よって、語り手の冒頭の言明をも揺るがす契機となったこの「さよなら、ジャック」という言葉は、ルーシー・モクヌイ、ジャック・カーズデイル、そして語り手の三者の奪冠を指し示している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 新井英永	４．巻 3
２．論文標題 三つの奪冠物語 ： ジャック・ロンドン「さよなら、ジャック」再評価の試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文科学論叢	６．最初と最後の頁 127 - 140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新井英永	４．巻 17
２．論文標題 D・H・ロレンスの情動論的読解に向けて――『カンガルー』と『哲学とは何か』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 熊本大学社会文化研究	６．最初と最後の頁 43-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 新井英永	４．巻 28
２．論文標題 書評：Takeo Iida, D. H. Lawrence as Anti-rationalist: Mysticism, Animism and Cosmic Life in His Works (Melrose Books, 2014)	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『D.H.ロレンス研究』(日本ロレンス協会)	６．最初と最後の頁 65-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関